

「春風馬堤曲」の生まれるまで

—— 蕪村論 ——

野 津 廸 子

江戸期における抒情詩人としての、蕪村のユニークさは、彼の二篇の詩曲「北寿老仙をいたむ」と「春風馬堤曲」によって、じゅうぶんにかがえらると思ふ。とりわけ「春風馬堤曲」は、蕪村六十二才の安永六年発表されたもので、近代的な詩人の才能の総てが凝集されている、といわれるまでにすぐれた抒情詩となっている。この詩は、いったいどのよう

にされた「春風馬堤曲の源流」という論文で、この点についての考察を試みておられる。ここで、この説をとりあげてみよう。

りにして、生まれてきたものなのだろうか。蕪村退蔵氏は、その著「蕪村」の中に取

られた「春風馬堤曲」の源流が、蕪村三十三才の延享二年の作「北寿老仙をいたむ」に見出だされることと指摘し、「少なくとも蕪村の心にはかうした韻文への創作欲が、若い頃から動いて居たのである」と述べておられる。さらに、彼がこうした風体をいかにして

習得したかについて考えを進め、これがこの

論の中心をなしている。私はこれを次のようにまとめてみた。

A 仮名詩 支考一派

かな 十字―五言 漢詩の律絶
かな十四字―七言 にならう
「逍遙遊」 五言
「山中尋酒」 七言

B 江戸俳人の間で行なわれた一種の韻文

素堂 『義蟲説』
嵐雪 「黒茶碗銘」
一種の自由な散文の形式

(形式方面の先がけ)

(抒情の新しい詩型)

C

「立君の詞」 楼川 享保二十一年 (一七三六)
「胡蝶(←)歌」 尾谷 寛保元年 (一七四一)
「袖浦(←)の歌」 文齋 延享二年 (一七四五)

(抒情の流れ)

「北寿老仙をいたむ」 延享二年 三十才 (一七四五)
「春風馬堤曲」 安永六年 六二才 (一七七七)

俳諧における韻文の一体としてAの仮名詩がまず考えられる。しかし、このような形式にのみはしっていったものの流れを、蕪村が

汲むはずはないと、氏は言われる。そして、Bの江戸俳人の間で行われた一種の韻文に、「北寿老仙をいたむ」の遠い源流を求めてお

られる。氏は、Cの枠の中の「立君の詞」にまず注目し、その自由詩の形式と抒情の流れとは、遠く嵐雪、素堂の韻文の、一種の自由な散文詩としての性格を受け継ぐものであり、蕪村の抒情詩は、この流れを汲むものとしておられる。Cの中の三つの詩は、蕪村が二十一才から三十才までの間に作られたもので年代的にも近い関係にあることを指摘しておられる。そして、支考の仮名詩は、単なる形式面の先がけとして認めておられるにすぎない。

暉峻康隆氏と清水孝之氏とは、頼原氏のこの説をふまえ、次のように述べておられる。暉峻氏「蕪村の追悼曲は、その格調の自由さにおいてあきらかに和詩の域を乗りこえてはいるが、しかし、それはあくまでも支考の創始した和詩の伝統の上に立つものである。」清水氏「先行作品としての支考一派の和詩の影響も大きいことを見逃すことはできない。」

頼原氏は「北寿老仙をいたむ」を「嵐雪、素堂の韻文」↓「立君の詞」という流れの発展の中に位置づけておられるが、それが妥当かどうか、支考の和詩の影響はどうか、等について、今の私にはまだ何も言えない。蕪村

が、この二つの流れのうちいずれを受け継ぐ者であったにしろ、結局、彼は、詩という新しい形式を受け継いだのだ。この和歌でも発句でもない新しい形式の詩に、真の抒情詩としての性格を与えたのが蕪村なのである。彼の詩の抒情性が、同時代の他の作品の追隨を許さないほど、みずみずしいものであることを知る時に、このことはおのずとわかる。

蕪村の詩の形式は、彼の独創ではなかったのだけれど、その抒情性は、やはり彼独自のものであった。「北寿老仙をいたむ」は、親交の厚かった早見晋我の死に対する、哀しみによってかきたてられた詩情が、あの自由な詩型を取って表現されたものである。若き日に、このような抒情詩をものすることのできた蕪村だからこそ、六十二才という年になって、あのように若々しいロマンティシズムの抒情詩「春風馬堤曲」をうたりことができたのである。

そこで、私は「北寿老仙をいたむ」から「春風馬堤曲」の生まれるまでの、蕪村の抒情詩人としての姿を、あとづけてみたいと思つた。同時に、二つの詩が三十二年の長い年月を隔てて現われていることに対して疑問を持ち、蕪村が、詩という形式を、発句、連句

に対して、どのように位置づけていたかを、知りたいと思つた。まず手始めに、蕪村の発句における抒情について考えてみることにした。「当時の俳人たちは、抒情の新しい詩型をもとめて韻文に注目していた。」と頼原氏が述べておられることから、私は、それでは、発句の形では、どの程度までの抒情が可能なのかという疑問を持つた。そこで、私は、発句の中にもみられる抒情について、見ていくことにした。あのすばらしい抒情詩曲をなした彼が三十二年の間、そのロマンティシズムを表現しないですごしたはずはないとも考えた故。

私はまず、頼原氏の「蕪村全集」と古典文学大系の「蕪村集」をテキストとして、その中から、抒情詩的であると思われる発句を、私なりに抜き出していく作業にとりかかった。これによって、抒情詩として成功している句が、全体から見るとどの程度にあるのか、又その句一つ一つがどの程度、抒情詩としてせまってくるのか、を私なりに明きらかにしようと思つたのである。そして、ついでに年代順に抒情詩の流れのあとづけができたなら、とも考えたが、これは、今の段階では無理なことがわかった。その理由は、私が抜き出した

句の出典が、多く蕪村句集にあつたことにある。蕪村句集は、蕪村の死後、几薫が蕪村の発句を集めて出版したものである。故に、製作年月日不明のものが多くということになる。

ところで、実際の作業に入つて、すぐ、これは大変なことをはじめたと思つた。この作業が、きわめて主観的 성격の強いもので、客観的な結論づけがむずかしい。俳諧についての私の目が不確かなこと、又、一つの句で抒情詩的なのかそうでないかの弁別がつけがたいものが多くあること。これらのために抒情詩として成功している句が、彼の発句全体からみてどのくらいあるのかをさぐる作業は、途中で放棄しなければならなかつた。又単に、そうした量的なものを求めるだけではつまらないこともわかつてきた。ただ、この作業を通して、彼の発句には、いろいろな種類があつて、抒情詩は、彼の作品のほんの一部分であることを、自分の目でたしかめることはできた。

以上のように、私は二つの作業を放棄しなければならなかつた。そこで、最後に、これはあきらかに抒情詩であるといえる数句を選んで検討し、それを通して発句における抒情

の問題を考へることにした。発表では三句をとりあげたが、紙数のつごうで、一句をとりあげて例とする。なお、私一人では独断におちいる恐れが多分にあるので、先学の考察を参考として、あげておきたい。

◎底のない桶あらくこけ歩あらく行野分哉

今度、蕪村の発句を全部読んでみて、私はこの句に一番心を引かれた。「底のない桶」が、激しい野分に吹かれて、あちこちとあてどなくこけあるくそのさま。黒い雲のたれこめた荒涼とした晩秋の野が、どうしてもその舞台として心に浮かんでくる。この句全体に、一種虚無的な何か、あてどなくさすらうものの姿、荒涼とした寂寥感が、ただよっている。野分の中をあちこちとこけ歩く底のない桶、それは、漂泊の中にその半生を送った蕪村その人の象徴のように思われる。

暉峻康隆「蕪村論」

◎底のない桶は捨てられたもの、無価値なるもの、意志なきものの象徴であり、しかしそれは孤独と流離の半生を持った蕪村の胸底を時折かすめたであろう虚無的な漂泊感であり、青春の倫落感であらねばならぬ。

○ヴェルレエヌの「げにわれは、うらぶれ

て、ここかしこ、さだめなく、とびちらふ、おちばかな。」と同じような秋の日のボエジイがある。

このように、蕪村には「北寿老仙をいたむ」↓「春風馬堤曲」の間にも抒情をもめた生活があった。しかし、発句における抒情は、じゅうぶんなものであるとはいえない。

あるものを鋭く切りとることはできても、情感を流れとしてうたい上げることができない。ヴェルレエヌの「落葉」と「底のない桶こけ歩行野分哉」のボエジイが同じだとしても、前者がある情感の高まりをうたいあげることができているのに対して、後者はそれを鋭く、象徴化しておしだしているというちがいがあ

蕪村が「春風馬堤曲」を作ったについてはある門人にてた彼の手紙が、その間の事情を物語っている。それによれば、この詩は、「実は愚老懐旧のやるかたなきによりうめき出でたる実情」だといふのである。

蕪村は、彼の詩情を耐え難いまでにゆする典型的な素材、場面を得、はるかな少年の日への郷愁を、うたいあげずにはいられなかった。しかも、その郷愁の思ひは、一句でま

り、発句の形式から、どうしてもはみだしてしまふものであったに違いない。そこで彼は、発句と漢詩の巧みな複合形態によって、そこにロマンティズムと、エキゾチズムの美しい絵巻を展開し、彼のやるかたなき郷愁をうたいあげること成功した。彼は、盛り上りつつ流れてゆく情感を、ただ一句の中に盛りこむことの不可能さ、つまり、発句はよる抒情の限界に、早くより気づいていたのではないだろうか。

栗山理一氏は「俳句批判」の中で「この二つの抒情詩曲に示された彼の抒情のみずみずしい身振を、あたかもその両極の燃焼として蕪村の俳諧はただひたすら夢みるような青春の残光をとどめるにすぎない。」と言っておられるが、俳諧において彼の抒情性が、詩曲における如くに豊かにうたいあげられていないといふことは、即ち、発句という短詩形の限界を示すものではないだろうか。

なお、これは大きな問題なので、今後の研究課題の一つとして、さらに考察を進めたい。

(本学四年)